

此瀑布は山澗より巖をつたひ、只布をさらせるが如く落る、傍に石像の不動尊まします。略中  
眞に雲飛て素練をたれ、石に噴びて明珠を散すとは、此所の事なるべし。

〔北越雪譜初編下〕總瀧

總瀧とは、新潟の湊より四十餘里の川上、千隈川のほとり、割野村にちかき所の流にあり、信濃の丹波島より新潟までを流る、間に、流の瀧をなすはこゝのみなり、その總瀧とは川はゞはおよそ百間ちかくもあるべきに、大なる岩石龍の臥たるごとく水中にあるゆゑに、おとしくる水これに激して瀧をなす也、鮭こゝにいたりて激浪にのぼりかねて猶豫ゆゑ、漁師ども假に柴橋を架わたし、岸にちかき岩の上の雪をほりすて、こゝに居てかの搔網をなす。

〔日光山志〕華嚴瀧　此飛瀧は中禪寺湖水より落來る、水路凡七八町、流れて瀧口に至る、其水路も又一派の河の如く、幅十間餘、或は七八間の所もあり、猪南湖より四五町流れ來りて板橋を架せり、是を南岸橋と唱ふ、長十間許、この橋は歌濱への通路なり、又は足尾へ掛り上州筋より詣るもの、足尾峠の頂上より岐路を逕ること凡二里許の嶮を凌て爰へ來る、また本道を經て中禪寺へ詣るのは、大平の道脇に左へ折て行べき平坦の小路あり、凡五六町餘をたどりゆきて、此飛瀧の邊に至る、是は大谷川の水源なり、高七十五丈といふ、此瀧は東關第一の瀧にして、瀧口幅二間餘、瀧下は人蹤のかよふ所にあらざるゆゑ瀧を眺望すべき所なく、瀧邊より二三十間程も東寄に懸崖に差出たる危岩あり、藤蘿を捲て其盤の上へ下り、藤蘿を力にし持て頭を延ながら、飛流する水勢を覗見るばかり、直下する激勢遙に下る水煙雲霧盤渦として分ちがたし、華嚴瀧と名附るは、縁起にいふ、此山中有潤、則湖水流派青巒高巔紅日早照、清瀧近遠、岩上繁花芬々、恰如涵錦似嚴瀧、因名華嚴瀧云々、此華嚴瀧あるゆゑ、又深澤に方等瀧般若瀧の名も起れる歟。

〔日光山志三〕裏見瀧

荒澤瀧ともいへり、久次郎の大日堂より少しく行て、右の方に榜示あり、此